

「ギボン」又曰く、
 牟版抹土教徒の行事は祈禱、斷食、布施の三行事にして、之を神に近接する距離に當て嵌めたるは面白し、先づ第一に祈禱をすれば、神に向つての半途に身を持來すなり、此の上に斷食すれば、神殿の御扉の前迄來ることを得るなり、此の上に扉を開いて中へ收容されんことを欲せば、第三の布施の行事即ち慈善的の施物をなさざるべからず。

第一祈禱 毎日祈禱は曉方、正午、午後、暮方、夜中の五度なり、清潔にするこ
 とが祈禱の第一義にして、祈禱前、手と言はず、足と言はず、面と言はず、五體残
 らず、清水にて淨拭し、それ々の規定若くは習慣により、立つか、座するか、横
 はるかの態度にて、身自ら僧侶たるの考へにて、一生懸命に祈禱を捧ぐるなり、祈
 禱中精神統一の必要上、他宗なれば偶像に集中するが、本宗は偶像なき故、地平線
 上の一點、即ち「キブラ」の方角に向つて、精神を凝すなり、此の「キブラ」の方

角は最初「ゼルサレム」と定めしも、最後は滅迦に定め、「デルヒ」や「フェツヅ」
 や「アストラカン」の諸地方に於ける信者も皆此の滅迦の方に向つて祈禱すること
 となれり。此の祈禱は時さへ來れば、室内であらうが、街頭であらうが、構はない
 で始るのである、又本教は猶太教や基督教と異つて、毎金曜日は公衆の大祈禱日と
 して、此の目を殊更神聖にたもち、信徒全部は殿堂に集る。信徒中の長者は法壇に
 上り先づ祈禱を捧げ、ついで説法を始める。而して本宗に限り、神人間の仲介者な
 る僧侶なければ犠牲の供物もなく、其の間實に清らかなものである。

第二斷食 仙人其の他の難行苦行者の如く、肉を禁じ、色を禁じ、睡眠を禁する
 等の過ぎたることは命せざるも、一年に三十日間の斷食をなさしむ。是精神を純潔
 になし、身體を鍛ふに必要なればなり、「ラマダン」の月に入るや、本宗の信徒は日
 の出より日没迄、飲食を禁じ、女を禁じ、沐浴を禁じ、香料の使用を禁じ、凡て五
 管の快樂を嚴禁す、「ラマダン」の月は寒き冬に當る時もあれば、炎熱燦くが如きの

夏に會することもあり、夏に會せし時の如きは、體中の水分殆んど汗となつて出るが故に自然の結果、咽は乾いて焼けるが如くなるも、之を堪へて日没を待つなり、而して飲酒は本宗の絶對的に禁ずる處なり。

第三布施 本宗の慈善は人類は勿論動物類にも及ばしむ、施物施行は單に徳行の一として、賞與するに止めず、信徒たるもの、常に行ふべき普通の義務なり行事なりとして、濫濫の中にも繰り返し之を説きたり、恐くは施物に關し、精細なる法を作りしものは、古來牟版抹土を除きて、他に求むべからざるべし、施物の性質が金錢であれ、穀物であれ、家畜であれ、菓物其他の商品であれ、悉く適宜の案配を受けしむ、而して施物の分量に至つては最少額な箇人收入の十分の一なり、之にして尙ほ不足と思ふものは、五分の一まで施し得る仕組なり。

○本宗の信仰と不變永續性

「ギボン」又曰く、

「本宗は以上三行事の外に六ヶ條の信仰を有し、其の上に實行の四ヶ條がある、何れも之に伴ふに賞罰が以てせられてある、右六ヶ條の信仰中に左の二ヶ條がある。

世界に最終の日ある事

其の最終の日に於て我々ほ裁判せらるゝ事

偕て世界最終の日が來れば、死せし我々の枯骨に肉を生じ、元の人間となり、善惡の判決を受けて、善人は極樂、惡人は地獄へと追ひ遣らるゝのである。

本宗について驚くのは、其の布教に非ずして、其の不變にして永續する處にあり教祖が「メジナ」や「メツカ」に於て垂れし、單純にして而も要領を得たる教訓が十二世紀後の今日に至る迄、何等の變化なく亞刺比亞は元より、印度、亞非利加、土耳其に現存することにして、他宗には殆んど見るべからざる事柄なりとす、今若し基督教の「セント・ピートル」及び「セント・ポール」を地下より呼び起して、「ヴァチカン」の殿堂を見せしめば其の驚きや如何、自分の教へもせざる禮式により

自分も未だ其の名を聞かざる神を拜する今日の信徒を見ては、實に耐つたものにはあらざるべし。又右の兩人が「オックスフォード」或は「ゼネヴァ」に來りしならば如何、「ヴァチカン」に於けるが如き驚きはなさざるも、直ちに寺に入て自分の著作に、後世人が加へし批評註釋等の研究に、眼を丸くして従事すべしと思はる。其れに反して「セントソフィア」の土耳其の殿堂は如何、參詣信徒の數及び建築材料の耐久力等に關し、其の大きさや外觀に多少異なる處はあれども、教祖が始めて「メシナ」に建てし殿堂そのまゝを模せし處は嬉れしからずや、本宗の不變性は單に建築上に止らず、前にも言ひし如く教祖が垂れし教訓に對しても然りで、同教徒が常に歩調を揃へて、人間の空想と五官の誘惑を斷ち、

「予は一神を信ず、牟版抹土は神の教を傳ふるものなり」

の單純の信仰を終始不變に持するものなり、心内の神は眼に見る偶像によつて、卑しめらるゝものにあらず、教祖を崇めるは世間の道德を蹂躪するに非ず、今日に生

ける教祖の訓誡は其の子弟をして、道理と宗教の圈内に満足せしむ、「アライ」は餘りの有難さに教祖及びその眷屬を神の如くに言ひ現はした、彼斯の學者達は、神が同宗の長老達の肉體を借て住し給へりと言ひしも「サニテス」によつて「之等迷執は取拂はれたり、神の隨從者に對する生理上の問題、併に人間の自由と云ふことに就て、基督教にも本宗にも一時議論の沸騰せしことがありしが、基督は兎も角、本宗に於ては人情に逆らひ、社會の安寧を害する等の事は努めゝなかりし、之なき所以のものは本宗に限り僧侶なければ、政教の和合分離を論ずるの要なしである。従つて宗教の改革、僧侶の野心大望等之無きは本宗の幸福とする所である。大西洋より恒河に至る迄、浩濫は神學は無論、民事刑事の諸條を合はせたる大法典なりしなり。人間のあらゆる行爲、及び財産も萬古不易の神意に依て安全に保障さるゝなり、然るに此の政教合一法典が、時々實際に當つて不都合を來すことありと云ふは無學の判官が法文の適用を誤る上に「イスバハン」や「コンスタンチノブル」に

於ける民事訴訟へも、亞刺比亞の沙漠法律を適用するからである。その亞刺比亞が教祖の餘りの發展で外國征伐にのみ多く年月を費やし、顧らるゝの暇すらなかりし故か首都は「メジナ」より「ダマスクス」と「チグリス」河の間に移され、其の後神聖なる場所は戰亂の爲に穢され、人民は外國人の捧の先きにて支配さるゝ事となりしが、廣き亞刺比亞の沙漠の中で獨立し居るは「ペトウインス」國のみ、豈に淋しからずや」

と以上長々しく書き連ねしは外國人の牟版抹土教及び教徒併に其の國の批評なるが最後其の國に對するの批評最も悲しきものゝ如けんも、猶太國は無けれども世界に散在せる千五百萬の猶太人が潜かに猶太教の教ゆる處に従ひ、如何に世界を左右しつゝあるかの如く、牟版抹土宗も佛教基督教と肩を列ねて世界三大宗教の實を擧げ、現に三億以上の信徒を有せり、つまり亞刺比亞人は猶太人と等しく、國に生きる者にあらずして、宗教に生きるものと謂はざるべからず。

第六章 古事記と牟版抹土傳

予は明治四十四年の春、不朽青年會の爲め、牟版抹土に付き何回目かの講演を終つて歸宅し、其の日の新聞を見れば、古事記撰上者の榮譽と題し、太朝臣に位階贈陞の記事が出て居る左の通りである。

『昨十三日は、本邦最古の國史たる、古事記を撰上せし、元明天皇和銅五年正月二十八日より、満千二百年に相當するを以て、其の撰上者たる、太朝臣安萬侶の功勞を思召され、特旨を以て左の如く、位階陞敍の御沙汰を下されたり

故從四位下

太朝臣安萬侶

贈從三位（特旨を以て位階追陞せらる）

其の次の記事なる、古事記撰上記念祭の題下には祭料金二百圓御下賜の御沙汰の事もあり、記念祭の順序等も精しく記載して、最後に「此の點で尊敬する」と云ふ

見出しを据ゑて、文學博士上田萬年氏の説を左の通り掲げた。
 『安萬侶自身の経歴は、唯古事記を撰上した人と云ふ以外に、性格其の他に就て一切記録が残つて居ないから、少しも分らぬが、私は古代の國語をそのまゝ残してくれ、神代の事實を隠さず、文飾せず、其の儘残してくれた人として尊敬して居る、随分今の人の眼から見ると、思ひ切つて大膽に事實を有りのまゝを書いてある、假へば陰陽等に就ても思ひ切つて書いてあるが、史學上の記録としては、その有りの儘な處が宜いと思ふし、又神代の記録は勢ひ然らざるを得ぬものと思つて尊敬して居る、それに日本記になると、餘程漢文に近くなつて居るが、古事記は神代の國語が、殆んどそのまゝに残してあるから尙更嬉しい、若し之を傳説的に無暗に面白くして見たり、善い事は無暗に善く書き立て、都合の悪い處は省いて了つたら史學上の記録としては、聊かつまらぬものになりはせぬか、外國人が日本の神統史を研究し、古事記を研究した人も大分ある、先づ英國では「チャンバレン」教授、それ

から「アストン」氏の神代史、此の中には日本紀の翻譯らしい處もある。此の外に英人では「サトウ」氏が祝詞を研究して著書を出して居る、獨逸では「ナホド」の日本史之は單行本で、世界歴史の「シリーズ」の中にも、そのまゝ此の本が編入してある、此の中にも神代の事が載せてある、同じく獨逸で「フロレンツ」博士が、現に今古事記の翻譯をして居る、日本紀の翻譯は既に出來上つたが、之も東洋研究叢書とでも云ふべき、叢書の中の一編になるのである、此の外に佛蘭西の巴里大學の教授「ルボン」氏が神道研究と云ふ様な書を出して居るが、之等は所謂孫引で、古事記や日本書紀の原文から、直ちに研究した譯ではない。前に言つた獨逸の「フロレンツ」博士は日本文が達者に讀める、古事記位は讀むかも知れぬが、専ら「古事記傳」に依つて研究して居るらしい、「サトウ」氏なども或る孫引の方かも知れぬ、併し兎も角も之だけ神代の研究が出来るのは、つまり古事記のお蔭だから、私は前言つた様な理で、太安萬侶を尊敬して居る云云。

そこで牟版抹土の傳記は如何と言へば、彼が死を神化せしめんと、草木自づと土を出で、位置を換へ、獸や石迄が口を利くなどは、釋伽牟尼如來入涅槃の當時以上である。然るに教祖の姪行一件を塗抹せざるは、所謂上田博士の史實を尊ぶ處から來て居るのか、果た塗抹せんと欲するも餘り世間に知れ過ぎ居りて、今更塗抹も出來兼ねる故、せめては神祕奇蹟談を追加して、幾分か其の醜を覆はんとするのかも知れぬが、兎に角事實を事實として、今日我輩の耳に入らしめたは、古事記に思ひ切て陰陽を憚りなく書いたと同様、史實の上からは予も博士と同様嬉れしくも感じ敬意も表する、特に奇遇なのは安萬侶も牟版抹土も共に一千二百年前であることである、すると古代は東西共に陰陽道が頗る盛なものであつたのであらうか、博士も『神代の記録は勢ひ然うならざるを得ぬものと思つて尊敬して居る』

と言はれて居るが、勢ひ然うならざるを得ぬとは如何なる勢ひであらうか、又然うならざるを得ぬ理由は、如何なるものであらうか、科學的研究は博士に待つとして置かう。

○「モルモン」牟版抹土「日本紳士」

動物には交尾期と云ふ期間があつて、期間以外には猥りに交尾しない、然るに人類には其の期間制がなく、隨時隨處勝手氣儘である、ところが、我が國は古來より「春三夏六秋二無冬」と氣候に應じて、交合度數の比準が、閨中不文の法律の第一條として守られて居る、此の不文法律は古來何億萬男女の經驗より、歸納的に定めたものである、右法律の定むる度合比準を見るに、最高度は夏期の六で、最低度は冬期の零である、こゝを以て考ふれば人類の異性慾は熱氣に多く發生し、寒氣に發生を少くするものと思へる、そこで亞刺比亞の氣候は如何と來れば、半ば熱帶で而も沙漠で其の炎熱は日本の比でない、左すれば自然生理上、多妻多妾の傾きを生じ、牟版抹土の十一妻も敢て咎むる程の事は無い、是れ自然がせしめし古來よりの習慣である、然るに茲に女性の側より論ずれば女性逆も人間なれば、右の理窟を女性の上

に適用せざるべからず、果せるかな女性も之を適用したり、其の結果や閨門常に亂れ嫉妬排擠反目軋轢は兩性間に行はれ、殆んど手の着くべきなきの状態を常とせり、牟版抹土も矢張り其の中の一人なりしが、追々と年を取り、前記閨門不文法律の第二條「一年三年、三年七年、七年十年、十年一生」の其の一生の部に屬することゝなれり、此の第二條の意を説明すれば、婚後一年間の度數とそれ以後の三年間の度數と等しく、その三年間の度數とそれに續く七年間の度數と等しく、その七年間の度數とつゞく十年間の度數と等しく、その十年間の度數は其の後死ぬ迄の度數に等しと云ふ、つまり「時代慾度」の比準を示せしものにして、第一條の方は「氣候慾度」の比準を示せるものである。今や牟版抹土は第二條の一生の部に屬しながら、第一條の無冬に際會せし故閨門改革は此の時なりと、忽ち多數の妻を離縁し、一人四妻の制度を定め、姦通發覺の際は姦夫姦婦共に百鞭を加ふるの法を制し、大いに男女間の風儀を正しうせり、予が神戸在住の時分、東京より、米國「モルモン」宗の僧侶

「テイラー」と云ふ人がやつて来て、日本語で、

「これ私の宗旨のお經の原文で、之が日本語の譯文です、間違ひないか見て貰ひたいので來ました」

と原文と譯文とを手に示した、予は先づ譯文を見ると、恐くは「テイラー」自らが譯したものと見え、小學生の作文の如くで、逆も經文の翻譯としては見られないから、訂正の一例を示した處、

「それは六ヶ敷て分りません」

と却々強情で始末に了へぬので、閱覽を謝絶したことがある、此の人は「モルモン」宗管長の何んでも三番目の妻君の長男とかで、八番目の妻君が、特に此の「テイラー」を愛するとかで、多妻は牟版抹土と同様で、上田博士の所謂勢ひ然かせざるべからざるものがあるに相違ない、牟版抹土の然かせざるべからざる理由は前に説明したが、「モルモン」宗管長の然かせざるべからざる理由は牟版抹土の如く氣候

のせいでも何んでもない。

「願くば我が愛を普く一切の女に施し、所謂神の博愛の思召に叶はんとするなり」と云ふにある、日本にも古来より、此の管長の如きは尠くないが近來は僧俗共に此の「モルモン」の管長が殖へ、和尚の博愛に泣かざる、梵妻や亭主の博愛に泣かざる、妻君の多きを氣の毒に思ふ。「モルモン」や牟版抹土の方は同じ博愛でも公々然たる博愛であるからよいが、日本の博愛は秘密であるから性が悪い、其の上田博士の「勢ひ然かせざるべからず」が無いのであるから尙悪い、して見ると牟版抹土の滅妻は大抹に賞讃すべき事になるのである。

○牟版抹土は正直者なり

猶太教の信徒は、
「猶太教以外の者は人間にあらずして獸なり、故に之を殺し、其の財を奪ひしとて、罪にはならざるのみか、是れ神への奉仕なり」

と考へ居るには呆れかへらざるを得ず、牟版抹土教徒は、右手に劍、左手に經卷敵をしてその何れをか撰ましめ若し經卷を否めば殺戮掠奪直ちに行はれるのである、以上二教は何うしても宗教の定義を付し難いと思ふが、後者の方は、

「「ヅル・ファカール」の利劍を右手にして外を制し、亞爾、浩濫の聖典を左手に捧げ内を修めしめざれば、渺茫際涯なき熱沙の間に、出沒常なき慄悍無頼の遊民を驅つて、争で一國を成さしむるを得べき」

と云ふのであつて、佛家の所謂「善巧方便」である、野蠻より文明に導くの初歩であつたのである、剽略奪掠は彼の主義でない、其の證據には印度の「ストラット」に於ける彼の動作は如何、數千萬磅の償金を賤けて、唯一箇の「ラット」像を粉壘せしに過ぎざるにはあらざるか、又彼が「ヒラ」山の洞穴に始めて神使「ガブリエル」に遭ひし時、自ら疑ひ、「惡魔の我に戯れしにあらずや」と妻に語り從兄に問ふ處ありたり、何等の正直さ、何等の無邪氣さと謂ひたい、然るに彼の没後信徒共

が、教祖の價値を増さんが爲め、奇瑞奇蹟談を添へるは最負の引き倒しなり、然るに近時の教祖、會祖、會長、の類は、用もなきに高山大洋を跋涉し、遭ひもせぬ者に遭つたと稱し、傳はりもせぬに傳はつたと詐り、手製の奇蹟靈現を、自分の歴史へ自分で加へるなどは沙汰の限りである。

○同行者が大事

我が國西國三十三ヶ所の巡禮者が、菅笠に同行三人と書けば、實際は二人で、今一人は觀世音菩薩である、又四國八十八ヶ所の巡禮が五人と書けば今一人は弘法大師である、楊震の四知は同行四人である、我と汝の外に天と地の二人が見て居る、夜中と雖も賄賂の授受は出来ない、今恰度此處を書き居る時、天岡前賞勳局總裁が、編笠蒙つて市ヶ谷刑務所へ送られた、と新聞は報知して來た。總裁の編笠に同行果して何人と書きありしか、彼等は常に同行一人と思ひ居るから、此の世からなる地獄へ墮落するのである、傘版抹土が滅迦人の追跡を避くる爲め、洞穴に身を潜

めし時、洞口に人の囁きを聞く、迎も免るべくも見えぬから、從者は教主に向ひ、『我々主従二人にては迎も如恚る大勢には敵し難ければ、一層今の中に我より名乗り出て、罪を軽くせんは如何に』

と尋ねれば、教祖は頭を横に振り、

『我々二人とは何事ぞ、神が常々我に同行ましますを汝は知らずや』

とて洞穴を出でずして、終に難を免れたり、篤實の者は常に神佛の同行者を有して居るが、不篤實者は神佛の代りに、學術萬能主義、金力萬能主義、權力萬能主義、腕力萬能主義等と同行するが、大抵は途中で撒かれて、慘めな死を遂げるが落ちる。

○傘版抹土の布施制限と無僧論を賛す

尙も傘版抹土に感心なことは、慈善行爲に制限を付すると同時に、義務として每人に之を行はしめた事である、人間は兎角利己主義、利他の爲には一錢をも惜むこ

とは、時の古今場所の東西を問はず同一であるから、慈善行爲を全然自由意思に放任せず、法律として強制的に善行を積ましめた、然る代りに課税と同じく度合ひを定めた、即ち全収入の十分の一より少なからず、五分の一より多からざる額を布施として公衆の爲め差出すべしと云ふのであるが、その五分の一より多からずと定めた處に、布施慈善の本旨が籠つて居る、何故かと言へば、慈善金多きに失すれば一方に「乞食三日すれば止められぬ」の徒を獎勵激増すると同時に、他方には宗教屋なる一種の遊民を生じ、之等が各營業所を立派に、店頭の綺羅びやかに飾り立てたのが、世界各國至る處にある殿堂伽藍である、抹版牟土は「メジナ」に棗の粗木で膝を容るゝに足るだけの集會場を建てた、若し教祖現今の殿堂を見れば、「古代の質素を學ぶ處は、他宗に優つて居るが、之でも乃公の眼から見れば立派過ぎる、併し僧侶を置かぬだけに信徒を苦るしめることの無いのは乃公は嬉れしく思ふ」

と言ふに相違ない、又日蓮上人をして、今日の身延や池上を見せしむれば如何、「乃公は鎌倉を後にして、身延の山奥に掘立小屋同様の草庵を結び、筍三本貫つても、一々乃公が禮狀書いた位なもの、然るに今日身延鐵道で團參などとはこりや何うだ、此の七堂伽藍も焼いては建て、たてゝは又焼き、その都度金を集めて、己が鼻の下や臍の下の伽藍を建立するのである」

と言ふに相違ない、親鸞上人にしても亦然りで、

『愚禿は雪中人の門で石を枕に寝たこともあるが、今日の子孫を見れば』

と紅涙千丈、こゝを以て見ると牟版抹土が、神人仲介社を設けなんだは、實に千古の達見達識であつた、坊主や宣教師は全く無用の贅物不生産的動物である、彌陀を念ずるには坊主の紹介は要らぬ、神に祈るに神主や宣教師のお手引きは要せぬ、牟版抹土の課税的義捐募集は、世にも哀れに自活の道を失へる、鰥寡孤獨の救済に當るので、僧侶の如き遊民惰民を養ふ爲ではないから、五分の一以上の布施は禁じ

たのである、日本には之等遊民が多過ぎて、神道一派には全財産を寄附させるのがある、こうなつては宗教は國を亡ぼすものである、先般京都の東本願寺に先住上人の遠忘か何かあつて、全國特に北陸道方面より集つた善男善女の數は著しく多い、そこで此の中の一分隊が、七條通りの蕎麥屋に入り、晝飯代りにさんざ食つた後、代價を凡て半額にしろと云ふ談判、果ては巡査の出張を請ふた處、隊長は巡査に對し、

「拂ひたくても皆々錢を持たねいからだ」

と答へたので、巡査は一同を裸にして調べた處、胴巻の中に五百圓持つものもあれば、三百圓持つものもあり、一番少きは百圓なり、そこで巡査は、

「こんなに澤山持ちながら、錢は無いとは何だ、早く拂へ」

と詰責すれば彼等は異口同音に、此の金は乃公等が一生懸命、膏汗を流して溜めて、御本

山へ祠堂金として今日納めるのじや、鑑一文も手を付けさせないぞ」

と此の際、巡査の聲は國家の聲、門徒の聲は宗教の聲、生産の資金が斯くして不生産に轉するのである、こゝらを考へると牟版抹土の無僧主義は頗る結構、布施制限論は誠に有難い事と思ふ。若し日本の各宗も牟版抹土教の如く無僧主義になれば、文部省や内務省の手續も大いに減じ、従つて財政緊縮の上にも尠からざる利益を得る事であらうと思ふ。

——(終り)——

昭和四年十二月二十五日印刷
昭和五年一月四日發行



大鼎呂奧附
定價金貳圓七錢

著者 復堂 野口善四郎

發行者 石倉 千次

印刷者 東 勇 治

發行所

東京市牛込區拂方町
奧元帥舊邸橫通

二酉社

二酉名著刊行會

二酉社の振替口座
東京四七一〇番

澁澤子爵曰、何人も此の哲理的修養あるを要す

竹越先生著 惜春雜話

●青春惜しむべし ●人生は美術なり ●凡ての人は失樂園を有す ●戀か家庭か功名か ●政治的功名心 ●友情は戀愛よりも重し ●英雄時代 ●自ら道路を發見せよ ●道徳と黄金 ●我が敵は天の星我が友は地の砂子 ●道徳臭からざる道徳 ●盆栽教育 ●如何なる書を讀まんか ●志は兼濟にあり ●彈力ある心性 ●選民主義以上十六編を合して一冊とし惜春雜話と題す

此書一道の活氣を國民に吹き込まんとす其の眞氣温味恰も翳々たる春風に浴するが如し、人草木にあらず人生牢獄にあらず苟も高尚にして意義ある生活を送らんとする者僞君子の虚高や道學先生の出來ない相談を棄て、此の書を讀まざるべからず。

洋裝幀天金四六版 定價金貳圓 送料金拾錢

東京二西社發行 西二名著刊行會 振替四七一〇番

賜天覽台覽

增補訂正

一千五百年史

我が史學に一新生面を拓きし空前の大作にして千古不磨の名著
三又 竹越與三郎氏著 洋裝幀天金總振假名菊判八百頁の大冊

建國より幕府の衰亡に至る二千五百年間の史記、骨は文明史、肉は編年史、血は紀傳史、脈は哲學史、記述の筆は靈活明快、炬火の如き眼光、衡量の如き批評、描く所は政治、經濟、英雄、文學、美術、思想、宗教、社會風俗の變遷、參差錯綜の妙を極む。國民古今のパノラマ此にあり、東西を融合せる日本文學の一大產物日本歴史の大典此に備はる。

永井外務次官曰 竹越氏は恰もマコーレー卿の如し、氏の二千五百年史の如き、これをマコーレー卿の英國史に比ぶればその着眼の奇警にして文辭の雄麗なる點に於ては兩者その趣きを等うす、然もその批評の正しさに至つては遙に彼に優る。(外交時報評)

東京二西社發行 西二名著刊行會 振替四七一〇番

定價金七圓七角五分 送料金拾錢

賜天覽台覽

杉浦俊香先生著

畫界の維新

洋裝上製六版
定價壹圓五拾錢
送錢二十錢

次目内容

◎美を閑却せる世界改造は空想のみ ◎至上美の本義を明かにす ◎墮落せる我が畫界 ◎佛國畫界の推移を顧みよ ◎佛國に於ける十九世紀以後の畫風 ◎迷宮に入れる我が畫界 ◎學校の教は美術を衰滅す ◎公設展覽會の多くは國民性を破壊す ◎畫品の劣惡を嘆じて寸評を試む ◎美術政策の謬は國家に及ぶ ◎美術界の腐敗は速治を要す ◎評畫頁十四

今關天彭先生著

人文の淵源此にあり

支那人文講話

上製六判三七百七十頁
定價貳圓參拾錢
特價金貳圓
送料二十錢

次目内容

◎文字の話 ◎書籍の話 ◎經學の變遷 ◎文學の變遷 ◎書道に就て ◎宋以前の繪畫 ◎宋以後の繪畫 ◎小説戲曲一斑 ◎道教の話 ◎三代の金石 ◎山東の壽石 ◎支那最近の思想 ◎清朝小説

讀畫書院發行

東京市牛込區拂方町

一二西社發賣

振替口座
四七一〇

林 茂 淳 先生著

普及版金壹圓貳拾錢 送料拾四錢
官衙學校の註文殺到 市内送料不用

度量衡講話

判 六 四
頁 百 二 約

物の長短高低厚薄大小多少輕重等を計量するに標準とすべきものは「ものさし」と「ます」と「はかり」で此の三つのものは貨幣と相並び經濟上必要不可欠の出來なものである。國民の日常生活の上には關係の無いものはありませぬ。「度量衡講話」は我國の「ものさし」「ます」「はかり」の既往現在將來に互り、平易簡明に講述したもので、併せて便利なる新度量衡即ちメートル法の、成るべく速に實行されたことを希望を齎らして、本年七月一日から實施されることになり、換算表類の二三の書籍も出でました。手が、斯る書籍は未だ一つも發行になりませぬ。昔の人が指を曲げて寸を知り、物を伸して尺を知つてから、今日メートル法の實行に至るまでの興味に富んだ物語は此書を措いて他にありませぬ。改正度量衡法の全文も掲載してあります。農商務省工務局發表の「度量衡法令改正事項の要旨」も、メートル換算表も附載してあります。速に御講讀を御勸め致します。

發行所

東京牛込區佛方町
奥元帥邸横通

振替東京四七一〇番 二一

西 社

東京帝國大學經濟學部講師 河合良成氏著
前東京株式取引所理事

取引所講話

背皮菊判四百餘頁 特價金參圓五拾錢
送料八十錢

本書は學理と實際とを照合し、經濟法律の兩方面より取引所を專攻し解説せるもの、河合先生は農商務省在官時代より取引所を專攻し、後東株の理事者として、歐米市場を踏査し歸來激務の傍ら、本書を編述せらる。而して法令の改正に伴ひ全部改訂成れり。其の取引所論中に於ける一權威たるは勿論、廣く金融業者、商工業者、經濟學者、裁判官、辯護士、學生等の好箇の参考書たり、眞に取引所を理解せんと欲するの士は一讀を怠たるべからず。

改訂十六版

東京市牛込區佛方町
振替東京四七一〇番

二一

西 社

大學寮、東洋協會大學教授
宇都宮高等農林學校講師

滿川龜太郎氏著 二酉社 振替口座
四七一〇

賜天覽台覽

黒人問題

四判六金價特
三百三圓壹金價特
十三圓壹金價特
餘拾八圓壹金價特
錢拾八圓壹金價特
錢八十料送

問題

現帝室内大臣牧野伸顯伯の肖像がリンカーンの
それと共に黒人家庭に併掲せらるゝ理由は何か

「黒人問題」は此の疑問に答へて遺憾なきを得べし。黒人問題は今や單なる米國奴隸の問題に非
ず。實に人類史上に一新生面を拓き來らんとする世界的問題也。同時に虐けられたる有色民族解
放の大使命は我日本國民の肩上に懸れる國家的問題也。日本帝國が將來太平洋を中心とする第二
世界大戰の渦中に立つことあるべき場合、一億五千萬を算する黒人の向背は、國家の運命に偉大
なる影響無しといふ能はず。全日本愛國正義の戦士よ、地球上の距離刻々に短縮せられつゝある
今日、黒人問題こそ最も眞剣に考慮し研究して有事の日に備ふべき問題ならずや。本邦唯一の著

賜天覽台覽

西洋中毒

上四百餘頁及普
四圓壹金價特
製八圓壹金價特
四圓壹金價特
判六圓壹金價特
錢拾八圓壹金價特
錢八十料送

理學博士 遠藤吉三郎氏著 (好評六版)

思想的にも經
濟的にも疲弊
せる國力を回
復せんには本
書所論の實踐
を要すとして各
學校諸團體よ
り注文殺到す

●大阪毎日新聞曰 西洋文明の大なる矛盾を説き猶ほ進んで各種の問題に
涉りて西洋中毒の弊を一々指摘したるものなるが書中
學英語科廢止論、羅馬字反對論、加州問題等を始めとして
孰れも相當根據ある議論多く世人の反省に資すべき文字
尠からず。
●國民新聞曰 政治文學人情風俗等百般の事物に
論じ來りて甚だ適切なるものあり宜しく我等は之に覺醒
すべきなり。
●時事新報曰 西洋心酔の如何に我國に無意味に
最も緊切に其迷想を打破す意氣の熾烈にして論旨の劃切
なる殊に一字一句の末にも悉く些の空論を着けざる點に
於て何人にも一讀を促すべき價值あり。(掲載月日順)

東京市牛込區拂方町二番 西社 振替東京四七一〇番

賜天覽台覽 包荒子著譯

近時殊に教育界よりの註文増嵩し來ると同時に諸方より著譯者の何人なるかを問せらるゝも今は某高等官と答ふの外を言明するの自由を有せざるを遺憾とす

世界革命之裏面

元ス、シオ、の議定書 全譯 収録

頁十七百四判六四製上
錢拾七圓貳金價特約豫
(る成備準の本配時即第次込申)
錢四廿滿毫鮮 錢八十料送地内

好評六十版

帝國の根柢を覆さんとする現代の危険思想の源泉、自由平等、革命の叫びは是れ皆猶太民族の有する他民族崩潰政策である、彼等は右に資本主義、左に共産主義を持して世界に望み歐米の言論機關を掌握し世界の財界を支配し政治外交を左右しつゝあり、今や我が國民思想は彼等の術策に翻弄せられ、支那の動亂、政争の悪化、圓價の騰落、投機賭博の盛行、淫蕩文藝の流行、奢修の助長殊に近時頻發せし恐懼すべき不敬事件、學校師弟間の紛擾、各種同盟罷工、農村小作争議等皆是れ彼等の放散する危険思想に胚胎す。本書刊行の目的は彼等の秘密政略と實力とを我が國民に會得せしめて之が警戒を促すと共に吾人の學ぶべきもの多々あるを以てなり敢て一本を薦む

東京 荳 振 社 西 二 町方拂區込牛市京東
番 〇 一 七 四 通横邸舊帥元奥

595
184

